原子力復興への
羅針盤

原子力安全は小さなトラブルの撲滅から
“NY市治安行政”の水平展開を

原子力安全基盤機構（JNES）安全情報部長　水町　渉

東京より安全になったNY

ニューヨークといえば，パトカーのサイレンが鳴り響き，道から水蒸気が吹き出している薄汚い街，さらには殺人やマフィアの街，黒人のスラムの街といった悪いイメージが付きまとっていた。事実，42ストリートを歩けば，新宿の歌舞伎町のような異様な風景があふれていた。一方，ニューヨークの5番街を歩くと，それぞれの分野における世界最高の老舗がひしめく世界に誇る街であり，国連本部などもあって世界の中心という一面もある，いわゆるコンプレックスな都会である。

この街がまさに変身した。筆者の大好きなホテルは，世界の銀座4丁目のタイムス・スクエアの角にブロードウェイの劇場を持つ超高層のホテルであるが，最近は夜中でも普通に女性が付近を歩いていて，全く様変わりである。最も象徴的なのは42ストリートで，ダーティな歌舞伎町まがいの通りから，子供たちが大喜びするディズニーランドの店などが並ぶ健全な通りに大変身している。

このようにニューヨークを変えたのは，ジュリアーニ前市長である。彼はいろいろな改革をしたが，その第一は，あの有名な地下鉄の落書きを消したことに始まる。彼の哲学は「落書きや万引などのように小さな犯罪を許していると，やがて麻薬が始まり，さらには殺人まで発展する」として，それまで殺人の取り締まりに躍起になっていた彼以前の市長とは正反対の行動をとったのである。

アメリカを楽しく旅する方法

ジュリアーニ前市長の話は，後に詳しく紹介することにして，最近のアメリカは9・11以降，テロ対策が大変厳しく，また今年3月のスペインの列車爆破事件後は，一段と厳しくなっている。皆一様に「飛行場ではベルトから靴まで脱がされ，刑務所なみの扱いを受けるからウンザリだ」と言っている。

筆者はそうした経験がないと言うと，皆けげんな顔をして，「ノウハウを教えてほしい」とよく聞かれるので，ここで公開すると，次の3つの簡単な心がけだけで大丈夫だということである。

(1)絶対通じる英語の単語を覚えること
(2)靴は雨の日用のものを履いていくこと
(3)ベルトは単純なものを選ぶこと

こんな簡単なことで，アメリカの税関とセキュリティを何事もなく通過できるのである。まず税関では，ビサを持っている人は無条件に指紋と写真を撮られている。日本の税関でもこれをやろうとしたが，反対にあって実施していないが，このご時世には絶対必要だろう。所要時間は一瞬であり，一般の人にはそれほど違和感はない。現在，日本人はこの対象ではないが，アメリカではこの秋からすべての外国

人への適用を検討中である。

先日，筆者の前に並んでいた日本人が税関で10分以上つかまった。まず何の仕事で来たかを聞かれて，彼は「ケミカル・エンジニア」と答えたが，全く通じないまま何回も同じことを繰り返していた。そのうち「観光で来たのか」となって，彼は「アイ　アム　ノット　サイトシーイング」。日本語英語もここまでくると，相手はお手上げである。ホテルを聞かれると「アット　ファースト(最初は何々ホテルで次は)」からゴチャゴチャ言うので収拾がつかない。まず日本語になってしまっているケミカルとか，ビタミンなどの英語は通じないと心得ることである。また文章にしようとすればするほど，さらに通じなくなってしまう。税関での質問に対して文章で話す必要はなく，単語1つで答えればよいのである。

そこで，上記(1)の絶対通じる英語の単語を覚えておくのがコツである。筆者の例で言えば，仕事か？に対し「Business on Engineering」，ホテルは？に対し「Capital Hilton Hotel」，何日滞在？に対しては「Ten Days」の3言で終わり，30秒ぐらいで済む。もっとも私のパスポートには，山ほどの出入国のスタンプがあり，それが簡単に済ませる要因かもしれないが。

Body Checkを受けない法

続いて難問のセキュリテイである。2001年9月11日の光景は，世界中の人が忘れられないものである。筆者は特にワールド・トレード・センター・ビル103階にあった「Windows of the World」(世界の窓)というレストランから，小さな自由の女神像やマンハッタンの摩天楼を見るのが楽しみだったから，なおさらである。あの事件を機に，アメリカのセキュリテイが厳しくなり，普通の旅行者には不快なBody Checkが行われ。冒頭に書いたような嘆きが出ている。しかし，これにも簡単な対策がある。

まず金属探知器のブザーを鳴らさないことが重要である。このところ探知機の感度を異常に高くしているので，靴やベルトの金属部分で容易に反応してしまう。そうすると靴は脱がされ，ベルトは取られ，下着までと刑務所並の扱いになる。そのようなことにならないために，上記(2)の雨の日用の金属がない靴を履き，(3)の単純なベルトをしていくことである。またボールペンや小銭を別の箱に入れるのは当然である。こんな簡単なことで不愉快なBody　Checkを受けることもなくなるのである。

「壊れた窓」(Broken Windows)理論

原子力安全にも通じる地下鉄の落書き撲滅の話に戻ろう。

ジュリアーニ前市長が成功したのは，犯罪学者ジェームス・ウィルソンの「壊れた窓」(Broken Windows)理論を採用したからにほかならない。

同理論は。さ細なことが大きな事件に発展するというものである。

「工場や事務所の窓が壊れていると，通行人は誰も管理していないと考え，少数の人はもっと窓ガラスを割るために石を投げ始め，やがて窓ガラスはすべて割られることになる。そうすると通行人は単にビルが管理されていないと考えるだけでなく，ビルが面している通りも管理されていないと考える。そして多くの市民は，その通りをうろつき回る者たちに明け渡してしまう。結論として小さな無秩序がより大きな無秩序につながり，そして犯罪にもつながるのである」。

この「壊れた窓」理論は，「無秩序な雰囲気と相互に尊敬しあうことの欠如は，より深刻な反社会的行動につながる」という説である。

地下鉄の落書き消して殺人減らす

つまり，ジュリアーニ前市長は，この理論を実践し，さ細なことに注視すれば市全体が安全な街になると考えたのである。警察にはさ細なことに注視するよう命じ，地下鉄の落書き，無賃乗車，音量の大きな音楽，公共の場での飲酒などの軽犯罪の撲滅を指示した。それまでマリワナを吸ったり，万引き，無賃乗車，地下鉄の落書きなどの軽犯罪で裁判所から召喚状を受けた人の半分が裁判所に出頭していなかったが，前市長はそうした軽犯罪者の再逮捕を命じた。これによりニューヨークの地下鉄の落書きがなくなったのである。

このさ細なことへの取り締まりは，殺人都市といわれたニューヨークの殺人事件を激減させた。具体的には，1990年に2245件もあった殺人件数は，1997年には756件と約３分の１に減った。まさにジュリアーニ前市長は，地下鉄の落書きを消して殺人を減らすとともに，ウィルソン博士のBroken Windows理論の正当性を証明したのである。

一方，日本はどうだろうか。万引きや落書きは野放し同然で，治安は悪くなっている。万引きを捕まえた熱血漢の本屋さんは，万引きごときでと非難され，営業できなくなってしまった例も記憶に新しい。交番＝Koubanは，いまや英語になり，日本の安全の象徴としてアメリカに取り入れられたが，日本では警官不在の交番が多く，これが治安悪化の一因となっている。日本社会は1980年代までの良き風習を，バブル期とその後の不況期に捨ててしまい，逆に海外が取り入れているのが昨今の状況である。

この羅針盤シリーズで書いてきた原子力界の状況と共通しているといってもいい。

犯罪減少が経済を好況に

このような犯罪の画期的な改善は，ニューヨーク経済にも普及した。優良企業は犯罪都市から本社を他の地域に移転したが，犯罪の減少と税制の改革により，ニューヨークの利便性が再度見直され，本社が戻ってきて税収が劇的に増加してきた。具体的に言うと，犯罪が野放しにされていた４年間に，経済は連続して低下し，ニューヨーク市の雇用総数の９％に当たる32万6900人が失業した。

この解決には，まず上記のように地下鉄の落書き撲滅からはじまり，犯罪を最大限に削減できる場所に警官を配置するという，高度な犯罪追跡システムを導入し，麻薬や万引きなどの軽犯罪を徹底的に取り締まった。また生活の改善のために，1999年12月から100ドル未満の衣料品に対する消費税を廃止した。このような中産階級を中心に据えた常識的な判断に基づく改革を断行し，犯罪を激減させ，優良企業の本社を戻し，雇用を拡大し，福祉受給者数を32万人減少させ，市は７億ドル(770億円)を節約した。また犯罪が減少したことで観光客が増加し，70％まで落ち込んでいたホテルの占有率は90％にまで戻り，ニューヨークが復活したのである。

さ細なトラブル注視が重大事故を撲滅

現在，年金の問題が大きく取り上げられている。年金を払わなかった政治家が報道されて社会問題化している。官房長官が辞任し，また野党第一党の党首までが辞任に追い込まれた。この件については，さまざまな議論があるが，大きく言えば，２つの正反対の意見がある。第一は年金を払っていない政治家に年金の法律を作る資格はないという意見であり，正反対は，年金のシステムが複雑すぎて払う意思があるのにウッカリ・ミスで払わなかったのであり，それほど大騒ぎすることはない，という意見である。どちらの意見もある意味では正論であり，どちらを取るかはそれぞれの人の立場によって変わってくるだろう。しかし,確実に言えることは,ウッカリ・ミスというさ細なミスであっても，政治生命を揺さぶりかねない大きな問題に発展するということである。

最近，原子力の分野においても，ウッカリ・ミスと言えるようなさ細なトラブルが続いている。鍵の

管理ミスだったり，ボルトの締め方不足による漏えい，バルブの開閉ミスなど，それ自体は原子力の安全性に影響を与えるものではないが，一般市民から見ると，非常に判りやすい凡ミスであり，原子力という大切なプラントを管理しているにしては緊張感が足りないと思われてしまっている。

最近，各電力会社は小さなトラブルについてもドンドン発表する姿勢を明確にして透明性を高めており，今後ともこうした取り組みを加速させ，緊張感を持った管理を徹底して頂きたいものである。

ここに9・11に活躍したジュリアーニ前市長がウィルソン博士のBroken Windows理論により，地下鉄の落書きを撲滅して殺人を大幅に減らした実例を紹介したが，その本心は，原子力においてもさ細なトラブルを潰すことが重大な事故を撲滅させる近道であることを強調したかったためである。

昨年のわが国原子力の稼働率は世界で28位となり，１基当たりの被ばく線量も世界各国に比較して悪くなっている。昨年をわが国原子力の最低な年としてこれから復活していかなければならない。まさに「自信を取り戻そう日本の原子力―2004年を原子力復興の元年に」である。

写真―１　２００１年９月１１日の悲劇

写真―２　グランド・ゼロは現在も荒れ地のまま